以下の問題〔Ⅰ〕は必須問題です。全員が解答してください。

〔Ⅰ〕 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

a内因性の精神分裂病や離人症は鬱病とともに現代世界で重要な精神疾患であるといわれる。このことは、私たち現代人が自己と世界、自己と自己との間で調和的関係を失うようになったからであろう。およそ自己と世界とは相互性のうちで成り立っている相関者である。だから、その点からいっても、知覚というものが現在いっそう特別な意味を持って来ている。知覚は私たちと世界とのもっとも直接の接触の場であるだけでなく、世界そのものが秩序立った知覚をとおしてはじめてまとまりをもった世界としてあらわれるのである。そして秩序立った知覚、つまり総合的な感覚の働きは、人間を人間たらしめるものとしていつの時代にも私たちとともにあるが、［A］その在り方はいつの時代にも同じわけではない。私たち人間の感性は、それ自身歴史と社会のなかで形づくられ培われたものであり、歴史を超えてあるのではない。

すでにマルクス(注1)も、《五感の形成は、現在に至るまでの全世界史の一つの労作である》（『経済学・哲学草稿』「第三草稿」）と言い切っている。それは、次のような意味で言われたのであった。すなわち、社会的な存在である人間の諸感覚は、非社会的な存在としての人間の諸感覚とはおよそ異なっている。富は人間の本質の客体化され、展開されたものにほかならず、その富を仲立ちとしてはじめて、主体的な人間の感性の豊かさつまり富が、完成され、生み出される。音楽的な耳も、かたちの美しさに対する眼も、人間にとって享受されうるすべての感覚はみなそうである。なぜかといえば、ただ単に五感だけではなくて、いわゆる精神的な諸感覚や実践的な諸感覚も、ともに、人間化された自然によってはじめて形づくられるからである、と。

b人間的自然としての感性は、文化や社会とともに形成されたものである。けれども、人間のこのような感性は、いつでも必ずしも十分に発揮されるものではない。その点についても、マルクスはまことに鋭い考察を行なっている。［B］、ソヤで実際的な欲求に囚われた感性は、おのずとヘンキョウな感覚しか持ちえないだろう。飢えていまにも死にそうな人間にとっては、食物は人間的なかたちで、たとえば料理としては存在せず、ただ喰うための食物として抽象的に在るだけである。つまり、生物としての欲求を充たすだけのものにすぎない。同様にして、貧乏に悩まされて喰うや喰わずにいる人間は、どんなにすばらしい芝居に対しても、それを愉しむ感受性を持つことができない。同じことは★鉱物を売買している商人についても言える。彼は、鉱物をただ商業上の価値から商品として見るだけで、鉱物の質としての美しさや独特の性質をほとんど見ようとはしない。つまり、人々はいつでも人間として十全な感性を発揮しているのでもなければ、それに目覚めているわけでもないのだ、と。

こうして彼によれば、人間の感性は歴史と社会のなかで形づくられたものである。けれども、現実には十全な発揮が二つのことによって妨げられている。一つは感性を鈍化させてしまう物質上のキュウボウであり、もう一つは、感性を惰性化させてしまう、部分化し形式化したものの見方である。Xここにマルクスにおいて唯物論と弁証法とが結びつくことになる。けれども、五感の形成は歴史のなかで行なわれ、感性は歴史的なものであるというこの考え方は、これを私たちの観点から、つまり知覚を共通感覚の働きとして捉えなおすとき、もっと別のかたちで展開することができるのではなかろうか。すでにマルクスでも、五感が問題にされ、しかも聴くことや見ることがただ部分感覚としての聴覚や視覚の作用としてではなく、そのそれぞれを中心とした総合的な感覚の働きとして、とらえられている。それをもう一歩推しすすめれば、人間感覚の歴史的な形成と変化とを、知覚の深層の歴史としてとらえる視点が得られるだろう。五感そのものの精練と組み換えによる、緩慢で非連続な人間の知覚の深層の歴史、としてである。

五感あるいは諸感覚の組み換えとは、改めていうまでもなく、私たち人間の具体的な知覚が、五感のうちの一つの感覚が中心になって統合されたものから、他の感覚が中心に統合されたものに組み換えられることである。この場合とくに、視覚と聴覚と触覚の三つのうちどれが中心になるか、ということが問題になる。そのわかりやすい、しかも現在の私たちにとっても

並々ならぬ重要性をもっている例として、西欧の近代文明とともに、諸感覚のなかで顕著なかたちで視覚が優位化したということがある。近代のはじめに、〈五感の階層秩序の再編成〉[c]が行なわれたのである。

ヨーロッパの中世世界では、もっとも精練された感覚、すぐれて知覚的な感覚、世界とのもっとも豊かな接触をうち立てる感覚とは、なにかといえば、それは聴覚であった。そこでは視覚は、触覚のあとに第三番目の位置を占めていたにすぎない。つまり五感の序列は、聴覚、触覚、そして視覚の順であった。ところが近代のはじめになって、そこに転倒が起こり、眼が知覚の最大の器官になった。見られるものの芸術であるバロック[注2]が、そのことをよく示している。では、中世世界ではなぜ聴覚が優位を占め、視覚が劣位におかれていたのであろうか。それは一方で、キリスト教会がその権威をことばという基盤の上においており、信仰とは聴くことであるとしていたからである。聴覚の優位は十六世紀においても、神学にホショウされてまだ強かった。《神ノ言葉ヲ聴クコト、ソレガ信仰デアル audium verbi Dei, id est fidem.》、《耳、耳だけが〈キリスト教徒〉の器官である》とルターも言っている。それだけではない。それとともに他方で、視覚は触覚の代理として官能の欲望に容易に結びつくものと考えられたからである。スペインの聖者フアン・デ・ラ・クルスの先駆者たちの一人は、自分の眼で見るものをなんと五歩以内のものに限り、それを越えてはものを眺めてはならない、としていた。イメージにはなにか自然のままのもの、つまり規律的な道徳を破るところがあると考えられていたのであった。

ルネサンスの〈五感の階層秩序〉のなかで聴覚と視覚の位置が逆転し、視覚が優位化したことは、たしかに自然的な感性としての官能が解放されたことと結びついている。ところが、近代文明は、触覚と結びついたかたちでの視覚優位の方向では発展せずに、むしろ触覚と切りはなされたかたちでの視覚優位の方向で展開された。近代文明にあっては、ものや自然との間に距離がとられ、視覚が優位に立ってそれらを対象化する方向を歩んだのである。近代透視画法[注3]の幾何学的遠近法や近代物理学の機械論的自然観、それに近代印刷術は、その方向の代表的な産物である。と同時に、その方向を強力に推しすすめたものであると言えるだろう。［C］、時間も空間もすべて量的に計りうるものだと考えられるようになり、その結果、人間の時間も空間も宇宙論的な意味を奪われ、非聖化された。また、遠近法にもとづく錯覚が利用されて、一般に視覚上或る一点が固定され、そこに収斂するように描き出されたものこそが眼に見える、秩序立った、永続的なものであるというもう一つの幻影[d]がつくり出された。

たしかに視覚が優位に立った近代文明は、私たち人間に多くのものをもたらした。もしそのような近代文明がなかったならば、科学や技術の発達はこれほどにはならなかったであろうし、人間のための自然の利用もこれほどには達しなかったであろう。また、知識や思想の伝播もこれほどにはならなかったであろう。しかしながらその反面で、視覚が優位に立っただけでなく独走した近代文明は、見られるものを見るものから、知られるものを知るものから、対象を主体から引きはなしたのであった。そしてやがて、見られるものや知られるものはすべて物体化され、抽象化される一方、見るものや知るものは、そのように見られるものや知られるものを物体化し、支配せずにはおかない、冷やかなまなざしになったのである。《最大多数の最大幸福》というスローガンや快楽計算で知られる十八世紀末イギリスの哲学者ベンサムが案出した〈一望監視施設〉、つまり一望のもとに被管理者を見とおせるような建物、監獄などに誂え向きの建物が、最近あらためて人々の注目を浴びるようになった。[e]この施設からも、見ること、知ることが他の人間を支配する権力でありうることがわかる。

近代文明の視覚の独走、あるいは視覚のセンセイ支配に対して、ずいぶんまえから多くの人々によって、いろいろなかたちで触覚の回復が要求されてきた。視覚の独走は、すでに述べたように、人間と自然、人間と人間との間に見るものと見られるものとの冷やかな分裂、対立をもたらした。それに対して、人間と自然、人間と人間をそのような分裂や対立から救い出し、ふたたびそれらを結びつける力を持っているのは触覚だ、と考えられたのである。

（中村雄二郎『共通感覚論』による）

（注1）マルクス－カール・マルクス（一八一八－一八八三）。プロイセン時代のドイツの哲学者、経済学者。社会主義、労働運動の理論的基礎を与えた。

（注2）バロック－十六世紀末から十八世紀にかけての欧州の絢爛な芸術の様式。主に教会、王侯貴族等の権力の下で発展した。

（注3）透視画法－絵画における遠近法の一つ。ある一点を視点とし、人間の目に映るのと同様に遠くを小さく、近くを大きく描くことで、奥行きや遠近感を表現する。

問一　本文中の空欄 A ～ C に入る最も適切なものを、次の各群の①～⑤からそれぞれ一つずつ選べ。

A：1　① さしずめ　② そうはいっても　③ 換言すると　④ それに反して　⑤ してみれば

B：2　① それに反して　② 結局　③ すなわち　④ 他方で　⑤ もしかしたら

C：3　① なぜなら　② にもかかわらず　③ そうしたなかで　④ 一方で　⑤ いずれにせよ

問二　本文中の――線aの中で、「精神分裂病」とは、幻聴や妄想を伴い、自己同一性が喪失される精神の病的状態のこと、「離人症」とは、自分の身体や精神から自分が乖離（かいり）したような感覚がおこる状態のことである。なぜ、こうした病理を「現代世界で重要」だというのか。その理由の説明として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選べ。4

① 秩序立った社会をとおしてはじめて獲得される、まとまりをもった知覚そのものが、実は精神分裂病や離人症であるから。

② 歴史と社会のなかで形づくられた混乱の産物である、知覚の機能不全が、精神分裂病や離人症であると考えられるから。

③ 自己と世界、あるいは自己と自己との調和的関係が失われている現代における人間の知覚や感性のあり方を映し出すものだから。

④ 精神分裂病や離人症が歴史と社会のなかで形づくられ培われたというのは誤解であり、それらは人類の営為を超えてあるものだから。

⑤ 精神分裂病や離人症は歴史を通じて存在しており、秩序立った感覚は現代世界においても喪失された状態であるから。

問三　本文中の――線b「人間的自然としての感性」とあるが、これについて、(1)、(2)の問に答えよ。

(1)　その具体例を述べた次の①～⑤のうち、ここでの筆者の主張に**合致しないもの**を一つ選べ。 5

① 神社の鳥居をくぐると頭が下がる。
② 街中で突然喉の乾きを感じる。
③ 無礼な振舞いを不快に感じる。
④ 日本では桜の花をめでる。
⑤ 窃盗は悪であると感じる。

(2)　┆┆線★「鉱物」は、「人間的自然としての感性」が「十分に発揮され」ない例だが、ここでの「鉱物」と似たような例はどれか。最も適切なものを次の①～⑤から一つ選べ。 6

① ペットショップ店主にとっての、ペット
② 教員にとっての、クラスの生徒
③ 水道局長にとっての、水
④ 工場長にとっての、現場作業者
⑤ 野球選手にとっての、バット

問四　本文中の――線c「五感の階層秩序の再編成」とあるが、このことについて本文中で述べられている内容と**合致しないもの**はどれか。次の①～⑤から一つ選べ。 7

① ルネサンス期において、五感の階層秩序における聴覚と視覚の位置が逆転し、視覚が優位化したことは、自然的な感性としての官能が解放されたことと結びついている。
② 十六世紀までのキリスト教では、視覚は触覚の代理として官能の欲望に容易に結びつくものと考えられたので、五感の階層秩序の下位におかれた。
③ 近代になって、人とものや自然との間に距離がとられ、触覚が優位に立ってそれらの対象化がすすみ、五感の階層秩序で聴覚と触覚の位置が逆転した。
④ ヨーロッパの中世世界では、キリスト教がその権威をことばという基盤の上においており、信仰とは聴くことであるとしていた。
⑤ 聴覚が優位であった中世を経て、近代のはじめになって、五感の階層秩序に転倒が起こり、眼が知覚の最大の器官になった。

問五　本文中の――線d「もう一つの幻影（イリュージョン）」とあるが、なぜ「幻影（イリュージョン）」だというのか。その理由の説明として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選べ。 8

① 空間を平面で表現する方法として錯覚を利用している遠近法に基づく像が、かえってたしかなもの、永続的なものととらえられているから。

② スペインの聖者フアン・デ・ラ・クルスの先駆者たちの一人が自分の眼で見るものを五歩以内のものに限り、それ以上の距離で見えるものは幻影としていたことと類比されるから。

③ 絵画も、社会、文化により形成された人間の知覚の投影であるという認識からすると、聴覚や触覚による知覚より視覚によるそれが上位になるという認識もまた幻にすぎないから。

④ 眼が知覚の最大の器官になった近代はじめの芸術であるバロックが、幻視のモチーフを多用したのと同様に、現代の手法である幾何学的遠近法も、やはり錯覚の一種だから。

⑤ 視覚が優位に立って自然を対象化する、近代透視画法の幾何学的遠近法や近代物理学の機械論的自然観による像が、「幻影」から解放されたより良い幻だから。

問六　本文中の――線e「この施設」とあるが、筆者はこれをどのようなものとしてとらえているか。その説明として適切なものを、次の①～⑥から二つ選べ。なお、解答の順序は問わない。 9 10

① 視覚が独走した近代文明が、見られるものを見るものから、知られるものを知るものから、引きはなした結果、快楽の度合いの計算などが困難になった、その技術的な困難性を表すもの。

② 視覚が優位に立った近代文明が、人間のための自然の利用を可能にしたことの延長線上にある、快楽の度合いの計算などの技術的可能性を引き出すもの。

③ 最大多数の最大幸福という理想を提唱したはずのベンサムの見解の根底に実は存在する、見られるものや知られるものを物体化し支配する冷やかなまなざしを体現するもの。

④ 近代文明において、視覚が五感の中で優位に立つどころか独走し、その結果、知覚の主体から知覚の対象が切り離されていることを体現するもの。

⑤ 視覚が独走した近代文明が、見られるものを見るものから、知られるものを知るものから、対象を主体から引きはなしたので、最大多数の最大幸福が実現可能と認識されたことを象徴するもの。

⑥ 快楽の度合いの計算などの技術が現実に可能であるということにより、見られるものを見るものから、知られるものを知るものから、対象を主体から引きはなした視覚の独走をゆるしたとする考えを代表するもの。

問七　本文中の〜〜線X「ここにマルクスにおいて唯物論と弁証法とが結びつくことになる」とある。これについて説明した次の文章を読み、文中［ア］〜［ク］の空欄に当てはまる語句を、後の①〜⑤からそれぞれ一つずつ選べ。なお、同じ選択肢を何度用いてもよい。

社会の発展を理解する枠組みの一つに、マルクスによる唯物弁証法がある。本文で述べられている「唯物論と弁証法とが結びつく」唯物論とは、人間の［ア］も「人間化された自然」つまり所属する［イ］の物質的環境下で形成された、という考え方である。一方、弁証法とは、ある意見とその対立（定立、反定立）がある場合、一方を否定するのではなく双方の利点を採用し新アイデアを創出する（総合）という、概念の発達段階を指している。他方、社会あるいは「人間化された自然」を形成してゆくのは、人間自身の［ウ］に起因する人間行動であり、その形成（定立）ののち、物質的な不足と［エ］の惰性化による矛盾や抑圧（反定立）が出現すれば、その社会は「総合」のための闘争状態に入り、そこから次世代の物質的環境である［オ］へと「総合」がなされ、その中で人間の［カ］が再形成をうけると考えることができる。これが、筆者が「唯物論と弁証法とが結びつくことになる」とした所以である。これはもともと観念や思弁に対する思考方法であった弁証法を、［キ］が形成される環境である［ク］の進化のメカニズムという唯物的現実へ、適用する試みである。

ア［11］　イ［12］　ウ［13］　エ［14］　オ［15］　カ［16］　キ［17］　ク［18］

①　聴覚、触覚　②　文化、社会　③　知覚、触覚　④　自然、社会　⑤　知覚、感性

問八　本文の内容について述べた次の①〜⑥のうち、筆者の主張と**合致しないもの**を二つ選べ。なお、解答の順序は問わない。［19］［20］

①　聴覚が知覚の主軸であった中世ヨーロッパでは、対象を主体から引きはなし、その物体化、抽象化がおこった。
②　人間の感性は、物質上の不足と、ものの見方の惰性化により十全な発達が妨げられる。
③　知覚は、五感のうち一つの感覚が中心になって統合され、それは時代の流れの中で組み換えられる。
④　ルネサンス期に、視覚を中心とした調和的な知覚があらわれた。
⑤　中世ヨーロッパでは、五感の序列は聴覚、触覚、視覚の順であった。
⑥　視覚の独走が人間のあいだに冷やかな分裂をもたらしたが、それを克服するために触覚の復権を主張する人たちが存在する。

問九　本文中の‖線あ〜おのカタカナを漢字にしたときと同じ漢字が使われているものを、次の各群の①〜⑤からそれぞれ一つずつ選べ。

［21］　あ　ソヤ‖

①　実家のソセンを調べる。
②　あの人はソコウが悪い。
③　ソシナですが、どうぞお納めください。
④　美術大学でソゾウの制作方法を学ぶ。
⑤　ソジョウを見ていないのでコメントできない。

い　ヘンキョウ　22

① キョウバイにかけられる。
② キョウリョウな人には意見を言いにくい。
③ キキョウな振舞いが多い。
④ 渓谷にキョウリョウを建設する。
⑤ キョウカイ上に塀をつくる。

う　キュウボウ　23

① 今日は振替キュウジツである。
② ホテルのキュウカンに宿泊する。
③ 彼のキュウカクは鋭い。
④ シキュウ応援をたのむ。
⑤ キュウチから一転、勝利を得る。

え　ホショウ　24

① ショウガク金の給付を受ける。
② ホショウ金を貸主に支払う。
③ インショウ操作には気をつけよう。
④ ショウガイ賃金を概算してみる。
⑤ 議事進行にシショウをきたす。

お　センセイ　25

① 愚かな支配者にセイサイを加える。
② 鳥がイッセイに飛び立った。
③ 彼女の技術は十代でゼンセイキをむかえた。
④ 彼が突如セイジャクをやぶった。
⑤ セイジツな人なので雇いましょう。

以下の問題〔Ⅱ〕と〔Ⅲ〕は選択問題です。どちらかを解答してください。〔Ⅱ〕と〔Ⅲ〕を両方解答した場合は、高得点の方を合否判定に使用します。

〔Ⅱ〕 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

フランスに行って、最初に私が気づいたのは、フランスは、「2」から成る社会だということだった。

レストランに入る。私のような一人客はいないに等しい。家族連れも見かけない。セルフサービスの店を除いて、まともなレストランでは、基本的に男女のカップルで食事している。道を歩いているのも、男女二人連れが大半だ。ホテルに行く。シングルの値段とツインやダブルに二人で泊まる値段の差がほとんどない。シングル四〇フラン(注)、ダブル四五フランだったりする。時には、一人で泊まろうと二人で泊まろうと、値段は同じというところもある。

ほかにも、[1]いくつか不思議なことにぶつかった。

トイレもシャワーもない安い部屋には、ふつう剝き出しで洗面台がある。ところが、その横に見慣れないものがあった。便器のような形をしている。どんなホテルに泊まっても、それがある。しばらくたって、それが話に聞いたことのあるビデだと知った。それまで私はビデというのは女性専用だと思っていたが、そうではなく、どうもこれは下半身洗いという面があるらしい。女人禁制だという知人の部屋に行ってもビデがある。

地下鉄の駅も日本人からすると、不思議だった。地下鉄に乗って、そろそろ降りる駅かなと窓からホームを見るが、次の駅名が書かれていない。もちろん、その駅の名称は出ている。だが、日本人にしてみれば、その前と次の駅名が出ているほうが便利だと思うのだが、それがない。車内の路線図を見て、やっと次の駅がわかる。地下鉄でなく、遠距離列車に乗っても、同じ仕組みだ。

もっと不思議だったのはカフェだ。

公衆便所のほとんどないフランスでは、貧乏学生の私がカフェに入るのは、便意をもよおしたときに限られていた。あわててカフェに入る。トイレを探す。ところが、トイレはなぜか決まって地下の、しかも公衆電話の隣にある。ほとんどのカフェやレストランでそういう作りになっている。

あるとき私は、カフェの便器にしゃがみながら、いったいなぜどこもかしこも公衆電話とトイレが隣接する作りになっているのか、いや、そもそもなぜホテルにビデがあるのか、なぜ駅のホームに次の駅名を書かないのかを不思議に思っていた。

そして、ふと気づいた。

カフェは飲み物を飲みながらおしゃべりを楽しむところだ。ところが、フランス人は顕在的なものを思い浮かべたら、必ず潜在的なものを意識するのではあるまいか。［A］、「飲む」という行為を考えると、潜在的な行為である「排出する」という行為を思い浮かべる。「目の前にいる人と話をする」という顕在的な行為を想定すると、「目の前にいない人と話をする」という潜在的行為を思い描く。

フランス人の頭の中では、「飲みながらおしゃべりする」という顕在的な行為と「排出しながら、目の前にいない人とおしゃべりする」という潜在的行為が対になって結びついているのだ。だから、トイレの横に公衆電話を作る。本当を言えば、「飲みながら、おしゃべりする」に対応させて、「出しながら、電話をする」というのが理想なのだろうが、そうもいかないので、隣り合わせにしたのだろう。

このように、フランス人は様々なことを、対にして考える。そして、顕在的な面、プラス面、肯定面、現象として現れている面を思い浮かべると、必ず、潜在的な面、マイナス面、否定面、現象として現れていない面を想定すると言えるのではないのか。

そう考えると、フランスで不思議に思っていたそのほかのことも納得がいく。

なぜ洗面台のそばにビデがあるのか。洗面台が人間の顕在的な部分、つまり目に見える部分を洗うものであるのに対し、目に見えない隠れた部分、つまり下半身を洗うのがビデだったからではないのか。これも、「顕在・潜在」[2]ということで説明がつく。

駅名も同じだ。日本人は連続性を考える。東京の山手線を例にとると、代々木・新宿・新大久保・高田馬場と連続していると考える。だから、山手線の新宿駅のホームには、新宿という駅名とともに、代々木と新大久保の駅名が書かれている。ところが、フランス人は、そのような連続を考えない。顕在（すなわち、目の前にある駅）と、潜在（すなわち、目の前にない駅）の対立として捉える。だから、前の駅や次の駅を書かない。

フランス人、いや、もっと広く考えて欧米人は、「二項対立」でものを考えるとよく言われる。「魂と肉体」「人と自然」「真実と虚偽」「人と動物」「生と死」「有と無」を真っ二つに分けて考える。だから、欧米人は自然を人間と対立するものと認識し、自然破壊をすることになった、というように、しばしば説明される。

カフェのトイレもホテルのビデもホームの駅名も、そうした二項対立の現れと言っていいだろう。このような日常生活の、しかもかなり無意識の部分にまで、二項対立思考が行き渡っているのだ。

フランス人の頭の中では、「顕在・潜在」が頑として存在するのではあるまいか。「顕在・潜在」とは、ある現象が現れているか、現れていないかだ。言い換えれば、ある現象の有無であり、イエス・ノーだ。

フランス人は何かを考えるとき、連続的に考えるのではなく、二項対立として、そして顕在・潜在として分けて考える。それが日常生活の中にまで浸透しているのではないか。日常の様々な出来事の背後に、二項対立があるのだ。顕在があると、潜在を想定する。イエスがあるとノー、真実があると偽りがあるというように考える。現象の背後に、そのような二項対立を想定する。だから、論理的、分析的に考える。

それが、[3]フランス人の「知性」の秘密だとわかった気がしたのだ。

言うまでもなく、論理的で科学的思考の基本は、主体と客体、すなわち観察する自分と対象とを明確に分けることだ。そうすることによって、人間は対象を自分から引き離して客観的に観察できるようになった。たとえ、自分の仲間であっても、た

とえ自分自身の肉体であっても、[B]自分の内面であっても、それを一つの客体とみなして、観察できるようになった。

しかも、対象がある要素をもっているかもっていないかという二項対立を明確にすることによって、物事と物事の差異をきちんと認識するようになった。たとえば、猿と人間の違いを、様々な項目に分けて、ある要素をもっているかどうかを判断する。そうすることによって猿と人間の違いを体系的(P)に捉えることができる。

つまり、二項対立によって人間は意味の網目を手に入れたわけだ。こうして、現象を分析し、ある命題が真であるか偽であるかという判断もできるようになり、それを好ましいとみなすか否か、という意見をもつこともできるようになった。

そもそも、物事を二つにきっぱり分けて考えることによって、分析ができる。ある要素が存在するか存在しないか、真であるか偽であるか、好ましいか好ましくないかを明確にすることによって、現象を分析できる。「分析」とは、「ある物事を分解して、それを成立させている成分・要素・側面を明らかにすること」(広辞苑(えん))なのであって、要素を分けて思考することを前提にしている。

そればかりではない。顕在・潜在、イエス・ノーを対置することによって、物事を一方的に見ないようになる。ある見方があれば、別の見方がある、賛成意見があれば、反対意見がある、あることを好む人間がいれば、好まない人間もいるということが明確になる。[C]、ある意見を考えると、別の意見の存在を前提とし、それを考慮するようになる。

こうして、様々な二項対立によって、人間は分析し、厳密に思考し、自分の意見をもてるようになり、また多様な意見を考えるようになったのだ。

しかも、二項対立を思考の原型にすることによって、自他の区別も明確になる。言い換えれば、自分は自分、他人は他人という[X]主義的な意識が強まる。日本人のように、自他の区別を曖昧にして、他人を思いやったり、他人の世界に入り込んだりしない。そして、[4]多様な価値観を認められるようになる。一つの考え方だけでなく、別の考え方がある、別の価値観があるという認識をもてるようになる。

二項対立に基づかない思考では、そんなわけにはいかない。

二項対立に基づかない東洋的な思考を行う典型として、禅がある。禅の精神とは、鈴木大拙の『禅仏教入門』によれば、イエス・ノー、肯定・否定という二元性(二項対立)に基づかない精神のことだ。

だが、そうなると、対象を自分と明確に区別しないことになる。座禅がその典型と言えるだろう。私は門外漢(Q)なので詳しいことはわからないが、座禅というのは、おそらく自分と対象という意識をなくし、自分を対象と同一化して、自分をなくす行為なのではあるまいか。

東洋の思想、とりわけ日本の思想は、多かれ少なかれ、根本にこの[5]禅的な思想があると言っていいだろう。物事を二項対立で捉えない。人と自然は対立しているとは考えない。人は自然に囲まれている、人は他の生き物と連続した存在と捉える。生と死、自分と他者、イエスとノーも連続したものと考えている。対象を愛するということは、対象と合体することを意味する。

もちろん、東洋思想の中には、多くの人間をひきつけるだけの哲学的魅力がある。いや、それどころか、欧米思想では捉えきれない真実がこの中にあると、私自身も考えている。だが、このような、対象と一体化した思考で、物事を厳密に分析し、解明し、観察することは難しい。論理的に考えることができるとは思えない。それこそ、理解不能な「禅問答」になってしまうことは目に見えている。

対象と一体となると、対象を客観的に把握できない。観察もできない。二元的に思考しないので、肯定と否定を対置しない。そうすると、議論もできない。他者と同じような意見をもとうとするばかりで、自己主張もできない。分析も判断もできないことになる。

二項対立的思考が論理の基本であり、それなしには、[6]論理的思考ができるはずがないというのは、否定できない事実なのだ。

(樋口裕一『ホンモノの思考力』による)

(注)フラン…フランスの旧通貨単位。二〇〇二年にユーロの流通開始に伴い、廃止された。

問一　本文中の空欄 A ～ C に入る最も適切な語句を、次の各群の①～⑤からそれぞれ一つずつ選べ。

A：1　① けれども　② だから　③ なぜなら　④ また　⑤ もちろん

B：2　① あるいは　② かつ　③ そこで　④ それでも　⑤ ゆえに

C：3　① 逆に　② しかし　③ そして　④ ただし　⑤ まず

問二　‥‥線P「体系的」、Q「門外漢」の本文中の意味として最も適切なものを、次の各群の①～⑤からそれぞれ一つずつ選べ。

P：「体系的」 4

① 一定の秩序や原理に従って、整理すること。

② 個々の要素が、似ているものを集めること。

③ 異なるものが、集合してまとまっていること。

④ ヒトやモノを形によって、分類すること。

⑤ ルールに則り、有機的につながりあうこと。

Q：「門外漢」 5

① ある分野や領域の知識が乏しく、畑違いであること。

② 学問や芸を学ぶことが好きで、好奇心旺盛なこと。

③ 専門性がないにもかかわらず、知ったかぶりをすること。

④ 男性が羞恥心を捨て、苦手なことを披露すること。

⑤ 未体験の事柄を、あたかも体験したかのように話すこと。

問三　本文中の――線1「いくつか不思議なことにぶつかった」とあるが、筆者がフランスで出あった「不思議なこと」の例として**適切でないもの**を、次の①～⑥から二つ選べ。なお、解答の順序は問わない。 6 7

① フランス人の頭の中では、「飲みながらおしゃべりする」という行為と「排出しながら、目の前にいない人とおしゃべりする」という行為が連続性をもってつながっている。

② フランスのカフェやレストランでトイレを探すと、地下に位置することが多く、その隣にはほとんどの場合、決まって公衆電話がある。

③ フランスで地下鉄や遠距離列車に乗ると、ホームには日本のように次の駅名を表示する案内がなく、到着した駅の名称のみが示されている。

④ フランスでは、どんなホテルに滞在しても、日本人である筆者には見慣れない便器のような形をしたビデと呼ばれるものが洗面台の隣に設置されている。

⑤ フランスではレストランに入ると、セルフサービスの店を除いて、自分のような一人客はほとんどおらず、家族連れも見かけることがない。

⑥ フランスのホテルの値段は、シングル、ツイン、ダブルといった部屋の広さに応じて設定されており、一人当たりの単価が宿泊料金の基準になっている。

問四　本文中の――線2「顕在・潜在」とあるが、このように顕在・潜在を対に考えることの具体例を述べた次の①～⑥のうち、本文の説明と**合致しないもの**を二つ選べ。なお、解答の順序は問わない。 8 9

① 英会話で使える単語が限られていても、頭の中にはもっと多くの語彙があると考える。
② 大きな失敗をしてしまった時、今後の注意点を具体的に考える。
③ 急激に体重が増加した際、無自覚なストレス要因を抱えていると考える。
④ サークルの明文化された規則を理解すると同時に、規則の背景に暗黙のルールがあると考える。
⑤ 咳の症状が現れたら、自分の体に風邪以外の病気が進行している可能性を考える。
⑥ 爆発的にSNSが普及したことに対して、それが現代社会に必要不可欠なものだと考える。

問五　本文中の――線3「フランス人の「知性」の秘密だとわかった気がしたのだ」とあるが、こうした「フランス人の「知性」の秘密」について、本文中の〜線「自然破壊」の例に即して説明した次の①～⑤のうち、最も適切なものを一つ選べ。 10

① 自然は人間と対立するものだという意識を強くもっており、例えば、人間の力が及ばない自然界の現象にも関心が高いため、神に祈りを捧げることにより、天変地異に備える必要があると古くから考えてきた。
② 自分と対象を明確に分けて考える習慣があり、例えば、自然を一つの客体とみなすかどうか日常的に他者と議論するため、自分の考えを論理的に表現することに長けており、自然破壊についても知的に説明できる。
③ 日常の様々な出来事の背後に二項対立があると考え、例えば、自然破壊に関しては幅広い知識を持つことが重要だと理解しているため、文学、歴史、芸術、科学など多領域に関心をもつことにより、幅広い教養を養っている。
④ 無意識の部分にまで二項対立的思考が行き渡っており、例えば、自然と人間の関係について西洋的な思想と東洋的な思想の共通点を念頭におくことにより、自然破壊につながる行動を選択する可能性が高いと自覚している。
⑤ 物事を明確に分けて考える傾向にあり、例えば、自然を人間とは対立するものとみなし、文化の創造と文明の発展のためには、他者である自然を破壊することが妥当であると判断している。

問六　本文中の空欄 X に入る最も適切な語句を次の①～⑤から一つ選べ。 11

① 客観　② 個人　③ 相対　④ 全体　⑤ 利己

問七　本文中の――線4「多様な価値観を認められるようになる」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選べ。 12

① 二項対立に基づく思考では、ある命題に対する「真偽」について判断することが重視されており、真実だけを追求し、真実を成立させる複数の成分・要素・側面を考慮することができるため。
② 二項対立に基づく思考では、イエス・ノーを対置することが論理的で科学的な思考の基本だと考えられており、常に物事をイエス・ノーに区分しながら、様々な方法で分析することができるため。
③ 二項対立に基づく思考では、自分と異なる価値観を尊重しており、現象を分析する際には自身の価値観と一定の距離を置き、客観的に対象を観察することができるため。
④ 二項対立に基づく思考では、自分の意見よりも他者の意見を重視しており、自分の好みよりも、それを好まない他者を想定することが最優先され、他者の好みに共感することができるため。
⑤ 二項対立に基づく思考では、ある意見を考えると対立する意見が想定され、自他の区別も明確になることから、他人の価値観が自己の価値観とは異なることが当然に思われるため。

問八　本文中の――線5「禅的な思想」とあるが、筆者が述べる「禅的な思想」とはどのようなものか。次のア～オのうち、筆者の考えに**合致するもの**には①を、**合致しないもの**には②を、それぞれマークせよ。

ア　禅的な思想では、座禅により、自己を観察し、他者への理解を深め、自他の違いを確認した上で対象と同一化することが目指されている。 13

イ　禅的な思想では、対象と一体化した思考が常に求められるが、その前提には、人と他の生き物は異なる存在だという考え方がある。 14

ウ　禅的な思想では、対象と合体することにより愛することが可能になると考えられており、自他を認識し、他者を他者として理解することが求められる。 15

エ　禅的な思想では、対象と自分との区別が絶えず曖昧であり、二元的に思考しないため、人と自然が対立した存在だとは捉えていない。 16

オ　禅的な思想では、人と自然には連続性があり、人にとって自然は人の一部とみなされ、自然にとって人は自然の一部とみなされる。 17

問九　本文中の――線6「論理的思考」とあるが、筆者が述べる「論理的思考」の特徴として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選べ。 18

① 新しい考えを受け入れる際には、その根拠を確認した上で、自分の先入観を捨て、優れたアイデアを柔軟に受け入れている。

② 現象を多角的に捉えることが基本となっており、一方的に見るだけでなく、複数の視点から多様なデータを大量に分析している。

③ 他者と異なる意見を出すことが前提となっており、自己主張するだけでなく、現象全体を俯瞰（ふかん）した上で、他者の意見との相違点を整理している。

④ 正しい結論を得るために、対象となる現象を長期的に観察することが求められており、時間をかけて客観的に把握している。

⑤ 物事の表面的な関係性にとらわれずに、現象の背後にある根本的な原因を分析し、事象に対して距離をおいて客観的に考え、結論を導き出している。

問十　次の①～⑥のうち、本文の内容に**合致しないもの**を二つ選べ。なお、解答の順序は問わない。 19 20

① 対象と一体化した思考に代表される東洋思想の中には、多くの人間をひきつけるだけの哲学的魅力があり、それどころか、欧米思想では捉えきれない真実があると筆者は考えている。

② 東洋の思想、特に日本の思想は、多少の差こそあれ、その根本的な部分に禅的な思想があることから、人と他の生き物を連続した存在と理解する傾向があり、自分と他者は連続したものだと考えている。

③ 二項対立的思考によって、現象を分析し、ある命題が真であるか偽であるかという判断が可能になるだけでなく、それを好ましいとみなすか否か、という意見をもつことができるようになる。

④ フランス人は様々なことを対にして考えるが、顕在的な面、プラス面、肯定面、現象として現れている面よりも、必ず、潜在的な面、マイナス面、否定面、現象として現れていない面に注目する。

⑤ フランス人は、二項対立で思考することが定着しており、物事を連続的に考えるのではなく、日常的に現象の背後に二項対立を想定しながら、論理的、分析的に考えることを重視している。

⑥ 論理的で科学的な思考は、体系的な問題解決と知識獲得のために必要なものであり、対象の中に身を置き、その本質を徹底的に探求するフランス人の「知性」の秘密である。

〔Ⅲ〕を解答する場合には、必ず解答用紙（マークシート）の〔Ⅲ〕に記入してください。誤って解答用紙の〔Ⅱ〕に記入した場合には、0点となるので注意してください。

〔Ⅲ〕 次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、本文に至るまでの簡単な説明を最初に記す。

権大納言の娘で活発な性格の女君は周囲の人に男と思われたまま成人し、男装で宮中に出仕する。女であることを明かさずに右大臣の娘・四の君と結婚するも、好色の宰相中将が四の君と密通し、四の君は宰相中将の子を出産する。一方、女君の兄で内向的な性格の男君も、男であることを隠し女装で女東宮のもとに出仕する。そうとは知らない宰相中将は、男君にも興味を持つ。

宮の宰相[注1]は、忍ぶる[注2]道の逢ふことかたき恋思ひに嘆き沈みつつも、これは心を交はし折々過ぐさぬ行きあひに心を慰みて、例の癖[注3]は、「これは限りなけれどひとつことにてのみやはあるべきにはあらず、中納言[注5]の漏り聞かんところもいとかたはらいたし、なほ宣耀殿[注6]の尚侍はしも限りなくをかしうて、人に心おかるる振る舞ひは思ひのどめられなんかし」と、なほ思ひなされて、またたち返り宰相[注7]の君といふ人を泣く泣く語らひ尽くして、いかなる紛れにかありけん、御物忌固うて梨壺にもまうのぼりたまはぬ夜、入りにけり。

督の君、あさましういみじと思すにものもおぼえたまはず。さは言へど、ア つきづきしく心深くひきつつみて、動きをだにしたまふべくもあらず。泣く泣く恨みわびて、明けぬれば出でずなり A 。イ めづらかにかたみにわりなしと思せど、言ふ方なくて、固き御物忌にことづけて、帳の帷おろしまはし、母屋の御簾もまゐりわたしなどして、下なる人、上にもあげずなどして、心知りの人二人ばかりぞわりなく思ひ惑ふに、男は、名高く言はれたまふ御容貌を、ゆかしくいみじと聞き思ふ

御有様なれば、見たてまつらんと思ふにただ今はよろづ忘れたり。

2 そびえ、いと小さき手あたりこそおはせねど、癖と見ゆべくもあらず。御髪は糸を縒りかけたるやうにゆるるかにこちたうて、あながちにても見つる御顔は、ただ中納言の、いま少しあてにかをりすみたる気色添ひて、心にくくなまめきまされり。あぢきなく心を尽くす中納言の女君は、あてにをかしげに、こまかになつかしうらうたげなることぞ似るものなき、この御有様は、にほひぞめでたく、目もあやなる光ぞこよなかりけるかしと見るに、心肝も尽きはてて恨みわぶるに、大方はいみじうたをたをとあてになまめかしうあえかなる気色ながら、さらにたわみ靡くべうもあらず。心を惑はし涙を尽くして、その日も暮れその夜も明けぬべきに、思しわび、督の君も、「忌み果てぬれば、殿も参りたまふ、中納言もおはしなんを、かくてのみいとわりなかるべきを、まことに深き御心ならば、志賀の浦を思いて出で去なば、いかにうれしからん」と言ひ出でたまへ

B 声の、わりなく愛敬づきたるほども、ただ中納言なりけり。めづらしういみじきにさへ聞き惑ひ、いとど出づ

C 心地もせず。

P「後にとて何をたのみに契りてかかくては出でん山の端の月

めづらかなるわざかな」とも言ひやらず。

Q「志賀の浦とたのむることに慰みて後もあふみと思はましやは

わが君、よし見たまへ」とぞうつくしうのたまふに、あやにくならんもわりなくて、魂の限りとどめ置きて、骸の限りながら出でぬ。

その後、かき絶え御文の返事もなく、雲居にもて離れたまへるに、すかし出だされたてまつりしことの、妬くかなしう悔しきに、またこの頃は呆れ惑ひて、ものの隙もやと内裏にのみさぶらへば、中納言の参りたまふを見るに、つゆも違はぬ顔つきの、3かれはあてになまめかしう心にくき気色まさり、4これははなばなといまめきて、こぼるばかりの愛敬ぞすすみたまふらんかしと見るに、胸つぶれて、思はんところも忍ばれずほろほろとこぼるるを、中納言もいとあやしと思したれば、「いはけなくより隔てなく見馴れそなれて、乱り心地のうちはへ苦しうのみなりまされば、ながらふまじきなめりと思ふにつけて、乱れまされば、心弱くめめしきやうにはべるぞや」と押しのごふ。「誰も千歳の松ならねど、後れ先だつ末の露のほどこそあはれなる D 」と言ひても、心のうちには、5いかに我ををこがましとも見思ふらん、とはしたなけれど、なつかしううち語らふ。

（『とりかへばや物語』による）

（注1）宮の宰相－宰相中将のこと。

（注2）忍ぶる道の逢ふことかたき恋思ひ－人目を忍び、逢うことが難しい四の君への恋慕。

（注3）例の癖－宰相中将の女好きな性格。

（注4）ひとつこと－四の君との恋。

（注5）中納言－男装で出仕している女君のこと。

（注6）宣耀殿の尚侍－女装で出仕している男君のこと。「督の君」とも呼ばれる。「宣耀殿」は尚侍の居所。

（注7）宰相の君－尚侍付きの女房のこと。

（注8）志賀の浦－近江の国にある歌枕。

問一　本文中の‖線ア～ウの語句の意味として最も適切なものを、次の各群の①～⑤からそれぞれ一つずつ選べ。

ア　つきづきしく：1

①　わざとらしく　②　立場にふさわしく　③　注意深く　④　献身的に　⑤　慎み深く

イ　わりなし：2

①　みっともないことだ　②　割に合わないことだ　③　道理に合わないことだ
④　思いも寄らないことだ　⑤　悪くはないことだ

ウ　あえかなる：3

①　しっとりと美しく　②　きらきらとかわいらしく　③　つやつやと色っぽく
④　ゆったりとおごそかに　⑤　なよなよとか弱く

問二　本文中の空欄 A ～ D に入る最も適切なものを、次の①～⑨からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、一つの選択肢は一度しか使えない。

A：4　B：5　C：6　D：7

①　ず　②　り　③　ね　④　べき　⑤　る　⑥　な　⑦　ぬ　⑧　しか　⑨　べけれ

問三　本文中の〜線X～Zの敬語表現について、それぞれ**誰に対する敬意**を表していると考えられるか。最も適切なものを次の①～⑤からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、一つの選択肢は一度しか使えない。

X　思い：8　Y　たてまつり：9　Z　はべる：10

①　中納言　②　尚侍　③　四の君　④　宰相中将　⑤　宰相の君

問四　本文中の――線1「梨壺にもまうのぼりたまはぬ夜、入りにけり」の解釈として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選べ。なお、「梨壺」とは女東宮の御所を指す。11

①　尚侍が梨壺に参上なさらない夜に、宰相中将は宣耀殿に忍び入った。
②　女東宮が梨壺にいらっしゃらない夜に、宰相中将は梨壺に忍び入った。
③　宰相の君が梨壺に参上なさらない夜に、宰相中将は宣耀殿に忍び入った。
④　女東宮が梨壺にいらっしゃらない夜に、宰相中将は宣耀殿に忍び入った。
⑤　尚侍が梨壺に参上なさらない夜に、宰相中将は梨壺に忍び入った。

問五　本文中の――線2「そびえ、いと小さき手あたりこそおはせねど、癖と見ゆべくもあらず」とあるが、これは誰のどのような気持ちを表したものか。最も適切なものを次の①～⑤から一つ選べ。12

①　女東宮の、「尚侍の容姿に大きな欠点はないが、宰相中将の好みであるはずがない」という気持ち。
②　尚侍の、「宰相中将が迫ってきたら、自分の小さな手ではまったく抵抗できそうにない」という気持ち。
③　宰相中将の、「尚侍は女性にしては小柄ではないが、欠点というほどでもない」という気持ち。
④　宰相の君の、「尚侍は小柄ではないが美しく、誰に見られても恥ずかしくない」という気持ち。
⑤　中納言の、「宰相中将が手当たり次第に女性に手を出すことは、彼の欠点というほどでもない」という気持ち。

問六　本文中の和歌Pと和歌Qは、それぞれどのような歌であると解釈できるか。和歌Pについて説明したⅠ～Ⅲ、和歌Qについて説明したⅰ～ⅲのうち、それぞれの歌の説明として最も適切なものの組み合わせを後の①～⑨から一つ選べ。 13

【和歌P】

Ⅰ　後にまた会おうと口約束をしても、契りを交わしたあとでは山の端に消える月のように自分のことは忘れ去られてしまうであろうことを嘆く気持ちを表している。

Ⅱ　将来の約束を何もしないまま契りを交わしてしまったことで、山の端に沈んでいく月のように我が身も没落していくであろうことを嘆く気持ちを表している。

Ⅲ　後にまた会おうという口約束をしただけではいつまた会えるのか心もとなく、山の端に留まる月のように自分もこの場を立ち去りたくないと嘆く気持ちを表している。

【和歌Q】

ⅰ　「あふみ」が歌枕「志賀の浦」から導かれる「近江」と「逢ふ身」との掛詞となっていて、全体として「今別れてもまた後に会うことができる身であるとは思わないのか」と問いかける気持ちを表している。

ⅱ　「あふみ」が歌枕「志賀の浦」から導かれる「近江」と「追ふ身」との掛詞となっていて、全体として「これからも自分はあなたを恋い慕い、追い続ける身となるだろう」と恋焦がれる気持ちを表している。

ⅲ　「あふみ」が歌枕「志賀の浦」から導かれる「近江」と「文（ふみ）」との掛詞となっていて、全体として「たとえ今別れても、必ずまた手紙を送るから信じて待っていてほしい」と願う気持ちを表している。

①　Ⅰとⅰ　②　Ⅰとⅱ　③　Ⅰとⅲ　④　Ⅱとⅰ　⑤　Ⅱとⅱ　⑥　Ⅱとⅲ　⑦　Ⅲとⅰ
⑧　Ⅲとⅱ　⑨　Ⅲとⅲ

問七　本文中の――線3「かれ」、――線4「これ」とあるが、誰のことを指しているか。最も適切なものを、次の①～⑤からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、一つの選択肢は一度しか使えない。

3：14　4：15

①　中納言　②　尚侍　③　四の君　④　宰相中将　⑤　宰相の君

問八　本文中の――線5「いかに我ををこがましとも見思ふらん」とあるが、これは中納言のどのような気持ちを表しているか。最も適切なものを次の①～⑤から一つ選べ。 16

①　宰相中将が苦しんでいるのにさほど心配しない自分のことを、宰相中将はどれほど冷酷な人間だと思うだろうと不安に思う気持ち。

②　自分が実は女性であることを知られたら、宰相中将にどれほど変わった人間だと思われるであろうと心配する気持ち。

③　宰相中将より出世が早い自分のことを、宰相中将はどれほど妬ましく思っているであろうと懸念する気持ち。

④　自分も宰相中将に懸想していることが知られたら、宰相中将にどれほどうっとうしいと思われるであろうと気に病む気持ち。

⑤　妻である四の君を寝取られている自分のことを、宰相中将はどれほど愚かに思っているであろうと恥ずかしく思う気持ち。

問九　次の①～⑥のうち、本文の内容と**合致しないもの**を二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。 17 18

① 宰相中将は出産した四の君への興味を失い、新たに尚侍のもとへ通うことにした。
② 宰相中将は尚侍への思いを遂げるため局に忍び込み、一夜が明けても帰らずに居座った。
③ 中納言が女であることに感づいた宰相中将は、尚侍ではなく中納言を口説き落とそうとしている。
④ 中納言と尚侍の顔立ちは、雰囲気こそ違うものの瓜二つだと宰相中将は思っている。
⑤ 尚侍は宰相中将の誘いに一切応じず、和歌をやり取りすることで宰相中将を帰らせた。
⑥ 尚侍への思いに苦しみ涙を流す宰相中将を中納言は不審に思うが、表面上は親しく語り合った。

問十　次の文章の空欄 a ～ c に入る最も適切な語句を、後の①～⑨からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、一つの選択肢は一度しか使えない。

a： 19　b： 20　c： 21

『とりかへばや物語』は、平安時代末期ごろの成立とされる a で、内容や文体に同じジャンルの『源氏物語』の影響が見られる。『源氏物語』の影響を受けた作品は多く、鎌倉時代に入ると『松浦宮物語』『住吉物語』などの b が書かれるが、これらは平安時代の王朝貴族を主人公とし、内容・文体ともに『源氏物語』の模倣的な作品と位置付けられている。

男女の入れ替わりという特異な設定を持つ『とりかへばや物語』も、後代の作品に影響を与えている。たとえば、二〇一六年に公開された新海誠監督の映画『君の名は。』は、『とりかへばや物語』と、最初の勅撰和歌集『 c 』所収の「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを」という和歌から着想を得ている。

① 仮名草子　② 歌物語　③ 凌雲集　④ 歴史物語　⑤ 擬古物語　⑥ 古今和歌集　⑦ 万葉集
⑧ 作り物語　⑨ 説話文学